FOR ADULT ONLY
隊長最前線

…ヒュウウウウウウン……
拘禁室の隅から転送魔法特有の振動音が響こえた。
『(きた……!)』
フェイト・T・ハラオウンは振り返ることはせずにじっと
しながらも、背中に組され固縛された両手に力を込めた。

【時空管理局執務官 フェイト・T・ハラオウン 時間ダ】

(冷静、且つ厳格を忘れず)

執務官教育課程で体に叩き込まれた言葉どおりに身と心を
制御し、フェイトは無機質な機械音声の発した先へと振り返った。

アドミニストレータ
【(管理者)ノ命令ニヨリ 貴官ヲ連行スル】

音声の主は「傀儡兵」だった。人間サイズの大きさで、魔導
炉を内蔵せず、「ストレージ」と呼ばれる魔力タンクで稼動する
タイプのものだ。二体がフェイトの左右方に立っている。

『……』

フェイトは何も答えなかった。猿ぐつわが彼女の口を塞いで
いたからだが、それ以上に表情には出せない、心中の不安が大きく
ざわついてきたからだった。

『(似ている……『時の庭園』の警護用傀儡兵と……)』

――――それは当初、ごくありふれた違法武器密輸組織の捜査の最中で始まった。

得られた捜査情報の不自然なまでの多さと正確さに微の匂いをかぎつけたフェイトは、敢えて自分を「囮」にすることで、逆に組織の中枢を引きずり出そうと考え、機動チームの無線バックアップを受けながらアジトへと突入――――しようとした。

<ゴングよりライトニング1前方に目標多数接近中!>
<目標小隊進撃、なお増加中!左右に熱源反応!>
<前方よりRPGらしき熱源!>

フェイトの目論見は、無線であったはずのバックアップへの音声という形で崩れ去った。迅速な作戦放棄と撤退でかろうじて彼らを包囲網から逃したものの、フェイト自身は敵中へと「本当に」取り残されてしまった。

【降伏セヨ　恐ラザレバ攻撃スル】

フェイトを襲ってきたのは「傀儡兵」だった。魔導砲搭載タイプ、小型タイプ、蜘蛛型タイプ……、種類は様々だったが、彼女を驚愕させたのは何よりもそのデザイン・設計思想が記憶の片隅に残っていたものと一致していた事だった(※画像はイメージです)

「(プレシア母さんの作ったものと似ている……!)」

その驚きが彼女の剣筋を鈍らせ、一瞬の隙が生まれたのだろう。背後から迫ってきた蜘蛛型傀儡兵に気づいたのは、その尾部射出口からバインド弾が射出された直後だった――――。

「（確かに不覚をとってしまった……けど、敵の内部に入り込めたことには違いないのだから……ここからが本番、しっかりしなさい、私！）」

デバイスを奪われ、魔法発動をキャンセルする拘束具で、僅かに口のみを自分の魔力で維持するしかない状態でも、フェイトは絶望はしていなかった。
むしろ、その思考は事件ともうひとつの問題、即ち「傀儡兵たちを作り、操っている黒幕の存在」に向けられていた。

【進行先ハコノ先80mダ　徒歩デ移動シロ】

二体の傀儡兵に引き立てられ、転送された先は窓も扉もない通路の端だった。

「（やはり……）」

フェイトはこの指示にまたも記憶の奥底をかき回される思いを感じた。目的場所まで直接転送するのではなく、自分から向かわせる……かつて自分がうけた「お仕置き」も、いつもそうやって始まっていた……。

「（……私の予想が正しければ…この先には……）」

複雑な思いを抱きながら足を踏み出す、傀儡兵たちはついてはこず、何も言わずにじっとフェイトの後ろ姿を追っている。
この先に待っているだろう、凄惨ながらも懐かしい「過去」に自ら向かおうとする哀れな生贄の後ろ姿を――――。

「（私…、果たして予想が当たることを望んでいるのでそれとも……？）」

フェイトの脳裏にかつての記憶がよみがえる。今の自分のように体の自由を奪われ、決して望まぬ凌辱を受け入れさせられた数々の「お仕置き」……。あの通路の先に待っている「誰か」は、やはり「お仕置き」をするのだろうか……。
いつの間にか脳裏から事件や捜査のことは消え、焼けるような膣の痛みや、四肢を引きちぎらんばかりに引き絞る魔力線の絶望感を反芻することに思考が支配されている事を、フェイト自身は自覚はしていなかった。
そしてその思考に身体が敏感に反応し、内股が濡り気を帯び始めていることにも、彼女は気づいていなかった――――。

「――――久しぶりね」
『――――プレシア…母さん……』

通路の結束に設けられた部屋で『彼女』は10年前と変わらない姿でフェイトを待っていた。

「ずいぶん背が伸びて……それに、強くなったようね…？」

フェイトの『母』――――プレシア・テスタロッサは椅子からゆらりと立ち上がると、やはりあのころのようにゆったりとした足取りでフェイトの元へと寄ってきた。

『母さん……わ、わたし…は……』

戒口具で言葉を封じられているフェイトは念話で呼びかけるが、プレシアからはなんの反応もなかった。代わりにプレシアは敢えて自分の口から発せられる言葉でフェイトに語りかける。

「10年間……私がどうしていたか、気になる？
随分と苦労したのよ…アリシアを蘇生する術を求めて、それはもう長い間……」

息づかいが聞こえるほど近づいたプレシアは、硬直したまま動けないフェイトの長い金髪を片方の手で優しく梳いた。その感触にプレシアと共をわかったあのときよりも遥かに前、まだ自分が『アリシア』だったころの記憶を思い出したフェイトは、反射的に恐怖を忘れ、不自好な拘束具で塞がれた口を動かそうとした。
しかし……

「――――その間、あなたは何をしていたの？」

瞬間、髪に伸ばされたその指先が約束し乱暴にそれをつかんだ。激痛に顔を歪める間もなく思わずプレシアの手にあわせて半身を屈めてしまったフェイトに、プレシアは容赦なく呪いの言葉を吐く。

「あなたは管理局の犬として無様に生き、いまや執務官だそうね？義子は何人？友達と家族に恵まれ、随分と幸福な日々を送ってるそうじゃない？
――――アリシアの代わりに生かされてるその分際で！」

痛みと言葉の双方に耐え切れず片膝をついたフェイトは一瞬、プレシアと目が合った。その瞳の中に黒くよどんだ絶望を見て取ったフェイトは、きっと今の自分も同じ目をしているのかもしれないと、急転する思考の片隅でまるで他人事のように感じていた。

「あなたには罰を受けてもらうわ、10年分の罰よ」

冷たく言い放ったプレシアの目を、フェイトは見返すことができなかった。彼女の両手は部屋の天井からのびる電力線に絡めとられ、BJ維持に必要だったわずかな魔力すら奪われていた。

「アリシアのことを忘れ、自分のためだけに生きた10年の罪…解っているわね？」
『！…忘れてない、忘れてなんかいないよ母さん……っ！』

あえぐ様に念話で訴えても、プレシアには聞こえていないようだった。あるいは、聞こえていてあえて無視しているのかもしれなかったが、10年前と同じくその表情から真意を見取ることはできなかった。

「懐かしいでしょ？この鞭も、この部屋も、ここにはあなたが受けた"お仕置き"道具が全部残っているわ…」

たしかに、この部屋におかれたさまざまな責め具のほぼ全てにフェイトは見覚えがあった。三角木馬、舞台、壁にかけられた縛や拘束具の数々…すべて、10年前の自分を責めたてたあの道具だった。

「嗚呼……私…"お仕置き"されるんだ…あのころのように……」

10年前だって望んで受け入れたわけではない、けれどあの時のフェイトには自分を慰めてくれる使い魔(パートナー)と、何よりもプレシアに対する(信じたい)という希望があった。

……今は、その両方ともが無い。

「あなたはいつも私が与える罰を、黙って耐えていたわね……、それでも耐え切れずにあげてしまう悲鳴が、大嫌いなあなたの中で唯一好きなものだったわ。
――――――――――今は、どうかしら？」

フェイトの動揺に、背後に回ったプレシアが壁掛けから何かをはずす音が聞こえた。続いてバシンッという破裂音にも似た音、そして

――――――――ヒュンッ――――――――

――――――――――バシィッ！

「んん゛ぅぅーーっ！？」

瞬間、背中に灼けた火箸があてられたかのように錯覚し、フェイトは大きくのけぞった。熱感が引いてくるとともにそれは鋭利な「痛み」に変換され、彼女の肉体と精神をじんじんと蝕んでいく。それから逃れようと、フェイトは無意識のうちに体をよじらせ、まるで芋虫のようにその肢体をくねらせる。

「あらあら、あっけなく悲鳴を上げたのね？」
「く――ん…くぅ……」

背後から珍しく感情を乗せたプレシアの声がした。フェイトは振り返ろうとしたが、続く第二撃、第三撃がそれを許さない。

――――バチィッッッ！　「んぐぅぅーーっ？！」

――――ビシィィィイッ！！　「んっ゛む゛ぅぅぅぅぅぅっ！！」

「だらしが無いわね。執務官という仕事は、そんな体たらくでも務まるものなの？」

プレシアの侮蔑の言葉が鞭による痛みと同じくらいの熱を持ってフェイトの心に突き刺さる。そのたびにフェイトの体は胸、脚、腰それぞれが別の生き物のように怪しく蠢いた。その様はまるでゆらめく蜃気楼のようだ。
開口具で悲鳴も反論もできないまま、プレシアからの愛なき鞭は続いた。

「以前のあなたはもうすこし辛抱強かった筈よ。それが鞭を受けただけで情けない声をあげて……本当に堕落してしまったの？それとも――――」

ぐいっ

「んぐっ？！」

背後から鞭のもち手であごをしゃくり上げられたフェイトの耳元にプレシアの息づかいが聞こえた。

「……それとも、くぐもってよく聞こえないけど、もしかしてあなた……鞭の痛みが懐かしくて"悦んでる"のかしら？」
「っ！」

突然フェイトの下腹部にプレシアの手が伸びた。フェイトにとってはそれも驚きだったが、なによりも彼女を驚かせたのは…

グチュッ…ジュプッ…

「んっ…んふぅ…っん…」

自分の秘部から上がった水音と、同時に口から漏れた、熱い吐息だった。

天井からの魔力鎖が形を変え、フェイトの両腕はY字型に広げられた。同時に床からも魔力で編まれた拘束具が伸び、数秒後にはフェイトの両手両足をX字型に拘束する、円環型の寝台ができあがった。

「どうやらあなたは本当に堕落してしまったようね。堪え性がなくなっただけならともかく、こんな"イケナイ事"まで覚えて……」
「ち…違うよ母さん！これは……」
「どう違うの？」

改めて正直に問ったプレシアが初めてフェイトの言葉に応えたが、対するフェイトは応えに窮してしまった。

「アリシアは……決してこんな淫奔と同じにはならないわ」
「母さん！？そんな……」
「あくまで言い張るのなら……」

言いながら、プレシアはフェイトの戒口具を外した。困難な呼吸から開放されたのも一瞬、今度はプレシアの唇が乱暴にフェイトのそれを塞いだ。
突然のことにフェイトは目を白黒させる。

「説明してみせなさい。私のお仕置きにどこまで理性を保っていられるか……」
「あぅ……ん…か、母さん…？」

驚きのあまり声が出なかった。フェイトはこのとき初めて、プレシアの目に感情の炎が灯ったように見えた。しかしそれは、母親が娘に向けるような類の感情ではないこともまた、理解せざるを得なかった。
フェイトの瞳に深い絶望の色が差したのを認めたプレシアは、再びフェイトの唇を奪った。今度は深く、荒々しく、抵抗するフェイトの咥内に舌を突き入れ、絡めさせて離さない。その行為は同じキスでも、愛情も思いやりも無い、一方的なものだった。

「ん…ふぅうぁ…」

プレシアの両手が背中から回り、フェイトの両乳房をつかみあげる。そのまま洗濯物のように揉みしだくと、フェイトの口からはどう堪えても少量のため息が漏れた。
プレシアの責めは一見単調なようでいて、しかし同時に繊細な面もあった。大きくモーションをつけてゆっくりと乳房を揉みながら、同時に指先でフェイトの乳首の先端を撫でる。受けるフェイトには、大小織り交ぜた波が、休むことなく自分の体を揺らしているような感覚に囚われていた。

「か…母さん……やだ…や、め…」
「降参？」

————さわっ

「ひぁぁっん！！」

プレシアの右手がフェイトの無防備なわき腹を撫でた瞬間、波が電流刺激に変わったかのごとく、フェイトの脳髄を走り抜けた。

「そんな訳ないわよね？まだこんなに元気なんだから…」
「あ…あふ……んっ…んはぁ…ンっ！」

柔らかい腹部の肉の薄い部分をつつかれるたびにビクン、ビクンっとフェイトの背が震える。本当はあられもなく身をくねらせて逃れたい衝動を、彼女は必死に我慢していた。

「そう、その調子よフェイト……がんばって耐えることね」

冷徹に言い放つと、プレシアは左手の手先を腹部よりも下部————内股へと伸ばした。中心の窪みに分け入った指先がクレヴァスをこじ開けようと広がると、フェイトの体は無意識に前かがみになる。

「んっ！ぁ…そ、そこは……っ？」
「すごいわねココ、お漏らしでもしたの？」

フェイトは羞恥心に顔を歪めたが、プレシアに応えることはできなかった。確かに言い訳のしようがないくらいに、溢れみからはチャプチャプとはっきり聞こえるレベルの水音がしていたからだった。

「あなた、私に嘘らじゃないって証明したいんでしょ？」
「あ…ン……んぁ…は、はぁ……」
「なのにこれでは張り合いがないわ。
どうやらもう一段階、きついお仕置きが必要みたいね…」
「……あっ？」

————どさっ

魔力鎖が突然消滅し、フェイトはその場に倒れこんでしまった。プレシアはそんなフェイトを心底無感情に見下ろしていた。

数分後、部屋の中央には貴族家屋の屋根を思わせる急角度の三角柱が備えられていた。

「あ…く…」

フェイトは、BJと同じように魔力で編まれた拘束衣を着けさせられ、その三角柱の直上に背中に縛られた両腕とM字型に折り曲げられた両膝の三点で吊るされていた。

「執務官といえばエリート中のエリートの筈なのに、無様なものね」

プレシアの無情な言葉に、フェイトは反論することができなかった。3点で中空に吊り下げられた体はとても不安定で、左右に揺れるたびに平衡感覚が言い知れない不安を大脳に訴えてくる。
そしてなによりも、フェイトは自分の直下に横たわる柱
――――「三角木馬」の恐怖を、いやというほど知っていた。

「あなたはこれがとても苦手だったわね、見せるだけでも大声で泣いて許しを請うくらいだったわ、大人になった今はあれほど無様に泣き喚きはしないでしょうけど……」
「う……」

――――――ゴトン、ガラ…ガラガラ…

プレシアが右手をかざすと、魔力鎖はわざと大仰な音をたててゆっくりとフェイトの体をそのままの姿勢で下降させていった。フェイトはきつく目を閉じ、理性と平衡感覚を保とうと自分に言い聞かせたが、つづくプレシアの言葉に集中力を乱されてしまった。

「――――――もっとも、多少は安心してもいいわ、淫売のあなたにふさわしい"オマケ"が、今回は特別につけておいてあげたから」

「……え…何を…」

疑問を振り払えず目をあけた瞬間、フェイトのM字開脚で吊られた体の直下点、すなわちアヌスに不自然な圧迫感が生まれた。最初はかすかだったそれは、しかし体が下がっていくにつれて急速に違和感を増していく。

「あ…？ま、まさ……ぁぁあ…あああぁっ！」

それが三角木馬の頂辺から生えた棒――――――アヌス用ディルドーだと気づくのに、大して時間はかからなかった。

「あ…が……んあぁぁぁ……」

両腕を拘束していた魔力鎖が消滅すると、フェイトの全体重が一点
――股間に集中した。

「ほら、ちゃんと腰に力を入れないと木馬が食い込むわよ？」
「ん…っく…はぁっ！あぁ…っ！？」

言われなくてもフェイトには解っていた。しかし言われるとおりに腰肉に力をこめて体を浮かそうとすると、容赦なしにアナルを犯すディルドーを強く締め上げる結果になった。反射的にアナルを緩めると、今度は木馬の背が容赦なくフェイトのヴァギナを押しつぶす。

「あぐっ……ひぐぅ……っ…んーは、ぁぁぁぁあっ！」

前後を交互に攻め立てる淫靡な責の前に、フェイトはなす術無く翻弄されるしかなかった。プレシアはそんなフェイトの姿を無表情に、というよりもいっそ無関心のような目で眺めていた。
ゆっくりとフェイトのあげる悲鳴に、奇妙なリズムが生まれてくるころ

「……はっ！」
ヒュッ――――――――バチィィィィィィッ!!

「あぐっ！んぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……んぅ!!!!」

予期していなかった尻肉への衝撃に、フェイトは思わず正直な悲鳴を上げていた。

「こういうお仕置きの仕方は初めてだったわね……、どうかしら？」
「ぁ……はぁ……んぁぁぁ……」

鞭痕の熱がひいてくると、再び木馬とディルドーの感覚がフェイトの思考を錯綜し始める。責されて良いはずないと解っていても、身体は交互に襲いかかる責の激しさに抗えずにあのリズムを刻み始めるのだった。

「あなたがまた浅ましい喘ぎ方をするようだったら、容赦はしないわよ」
「(嘘…ここれが……私の…つ…ぁ…)」

すぐにでも振り下ろされるだろう鞭の第二撃を覚悟しながら、フェイトは真っ白になっていく思考の片隅で呟けたように思いていた。

――――ごぼっ　　ぐぶっ――――

「ぐ……んぅ……ぅ」
「排泄を我慢するのは得意みたいね？そろそろ1リットルくらいは入ったかしら？」

プレシアの言葉はフェイトの耳に入ってはいたが、受け答えをする余裕はなかった。彼女の意識は激しい波のように押し寄せる便意と必死に戦っていたからだ。

「んんぅ……うぁ……ぁぁぁぁ……」

フェイトは恥もプライドもかなぐり捨てて、プレシアにお願いです、排泄させてください」と宣言したい思いに囚われていたが、理性の最後の一線がかろうじてそれを思いとどまらせていた。しかしフェイトのアヌスにはプレシアの魔法で封印が施され、許可なしにはこの苦痛から開放されることはなかった。

「――――ひとつ、あなたにチャンスをあげるわ」
「う……ぁ…？」

プレシアの言葉が、今にも切れそうな理性の糸を優しく、残酷に揺らす。

「私の目的……――――アリシアを目覚めさせるために、もう一度私のために働きなさい。今までの地位、生活全て捨て去って」
「……？！そ……んな――ぁ…ぁぁぁっ！」

蘇い起こされたわずかな正気が首を横に振らせようとしたが、続くプレシアの言葉にそれもむなしく崩れ去る。

「そうすれば、封印を解いてあげてもいいわよ？」
「んんぅっ！？」

この上ない誘惑の言葉に気が緩んだのか、この瞬間に押し寄せた便意の波は今まで味いほど大きなものだった。その衝撃に脳裏のヒューズが焼ききれた、と感じたフェイトは数瞬の無意味な葛藤の後――――

『……さて、それじゃ改めて答えを聞きましょうか？』
『う……』

母親の目の前で自分の肛門が決壊する様を一部始終見られたという羞恥心からしばらく放心状態だったフェイトはブレシアの言葉に力なく頷いた。

『……わたし……は、母さんのために…』
『誰が「母さん」ですって？』

ぐりっ！

『あっ！ぐう……？！』
『私の娘はアリシアだけよ、あなたはアリシアのために働くだけの浅ましい下僕、それ以上ではないわ！』

ヒールのつま先を陰部に無慈悲にねじ込みながら吐き出される無情の言葉に、フェイトは絶望に深く塗り潰された焦点の合わない瞳のまま続けた。

『は、はい……私、フェイト・ハラオウンは…ブレシア様と…アリシアさまのために……お仕えいたし……ます……』

まるで自分の声帯が別の何者かに変われたかのように、フェイトは自分の意思とは正反対の言いを自ら口にしていた。ブレシアが魔法で操っているのだろうかとも思ったが、このような儀式ですらない茶番に小細工を弄する性格ではないことはよく知っていた。

『(私……どうして……まさか、戻りたかったの？あの頃の、この人のオモチャだった私に……)』

そう思いたくは無かったが、お仕置きが始まる前の、自分の不自然な乱れを思い出すと自信はもてなかった。

『それじゃぁ、撮影の準備をしましょうか』
『さ……つえ…？』

ブレシアはフェイトを見下ろしながら無情に告げた。

『あなたが管理局や友人家族を裏切って私の奴隷になったことを、公式発表するのよ、その姿態と一緒にね』

『――――私、フェイト・ハラオウン執務官は本日、一身上の都合により辞職いたします』

短いメッセージが添えられた光ディスクが複数の管理局職員に届けられたのは数日後のことだった。

そのディスクを再生した誰もが自分の目と耳を疑った。そこに映し出されていたのは、メッセージの主にして大切な親友であり、家族であるフェイトの痴態であったからだ。

『ンむっ……んふっ……』

――――ちゅぷっ　くちゃ……っ――――

『フフ……結構上手じゃない？どこで覚えたのかしらねっ』

絞首刑に処される囚人のように首に縄をかけられた状態で、フェイトは傍らに立つ女性(顔は判別できない)の股間に生えた擬似ペニスを口に含み、一心不乱にしゃぶっていた。

『ぁむ……ん…』
『よぅく濡らしておきなさい、これからコレがあなたのアヌスを貫くんだから…』
『うむ……んぱっ…ふぅ…は…はい…』
『もっとも、ココの濡れ様では、そう必要ないかもしれないわね』

女性の背後で画面が下に移動すると、床面にすえつけられた器具から伸びるディルドウがフェイトの女陰を機械的なグラインド運動で犯していた。

『あ……んふ……うふぅ…んっ』
『本当に私のために任務をこなせるようになれば、今度は私のほうのペニスで前を犯してあげる……嬉しいでしょ？』
『ぁ……はい、う、嬉しい、です……』

――――ヌグッ　ズンッ――――

『ああっ！あぁ…んっ！』

前後を同時に犯されながら、フェイトは彼女をよく知る者たちからは想像できないようなあられもない声を上げてよがり狂っていた。

『んっ…すごいわね、フェイトのアヌス……
でも、これもそのうち、ガバガバになっちゃうでしょうね…？』
『は……はいっん！も、っと……が、バガバに…してくだ…あぁぁっ！』

後ろからの突き上げとは別に、フェイトは自分の腰を動かしていた。それが意識してのものかどうかは解らなかったが、彼女を犯している女性には満足のいく反応だったらしい。

『そう…もっともっと犯してほしいのね？執務室の机書きも何もかも捨てて、私のメス奴隷になりたい？
――――それなら、もっともっと愛してあげるわ、フェイト』

『んあぁっ！ひぁぁっ！ひやいいっ！わ、私、なりますっ！ご主人様のメス穴に！穴奴隷にして……っぁぁぁあっ！して、ください…っ！私を…淫乱マゾ豚のフェイトを…ご主人様のチンポで…愛し…て……』

最後は喘ぎすら交えて、フェイトはカメラの前で恥も外聞もなく喘びつづけた。前後から責めたてる二本のペニスに背筋を震わせながら、それでも彼女は「愛して」という言葉にこだわろうとしていた。
それを知ってか知らずか、後ろの女性の腰使いはますます激しくなり、フェイトの嬌声に女性のため息とも喘ぎともつかない息遣いが混じり始めた頃――――

『――っ！い、いくわよ、フェイト…さん。カメラに向かって言いなさい！』
『あん！あ……　あ……私、もう…イキます……なのはに…はやてに…リンディ提督さんに……ぁぁぁぁあ…さ…さよ……な』

「沙慈・クロスロード」

次回「ツインドリルドライブ」　それは、ドリルを駆逐するドリル……

赤ハロをつないで端末アクセスするのは特に構わない……
だが　サーバ内に自作のエロ小説を書いてパスワードもかけずに放置するのはガンダム的じゃないな……

もいりゾ バカです。

ロケットは全部とってるから忘れた頃にネットに貼ってやるです。

ちょ!!?

見たの?!
全部?!

ていうかなんだよガンダム的って!!

メスドレイ!
メスドレイ!

うっせ！
黙れドリルヘッド！

「フェイトだけの十字架」　改め　「サジのCB内での人格評価」終(二重の意味で)

For ADULT Only

♂アニメのスタッフロールの中に

何故か書かれた

官能小説♫

「マッシブワンダーズ」
3番

隊長最前線